

「コバケン」というのは指揮者「小林研一郎氏」の愛称です。私の母と同じ、昭和15年生まれ85歳にして、現役の指揮者です。日フィル（日本フィルハーモニー交響楽団）の桂冠指揮者を始め、国内の多くのオーケストラの常任指揮者や音楽監督を務めています。毎年大晦日には、ベートーベンの交響曲1番～9番（第九）までを、11時間ぶっ続けで指揮するという、離れ業をやっけてのける超人的指揮者です。私も、毎年大晦日にこの演奏会を聴きに行くのが恒例になっています。

オーケストラの鑑賞は、もちろん客席1階席の中央付近や、2階席前列が最適です。音の聞こえ方も、演奏者の様子も良く見えるからです。しかし指揮者の仕草や表情を見るには、演奏者側…つまり舞台の後方からが最適です。東京文化会館では無理ですが、サントリーホールでは舞台の後方にも客席（P席）があります。合唱団が使う時は無理ですが、私はコバケン指揮のオーケストラだけの演奏会では、このP席を予約します。指揮者の表情がよく見えるだけでなく、すべての座席の中でチケットが最も安いのも魅力です。

先日の休日も、日フィル+コバケンの演奏会がありました。モーツァルト「クラリネット協奏曲」と氏の得意曲目の一つ、ベートーベン「英雄（交響曲第三番）」でした。温和な性格の氏ですが、演奏が始まると表情が般若のように一変します。まさに「炎のコバケン」にふさわしい、年齢を全く感じさせないタクトでした。

演奏終了後も、自ら各パートの演奏者に分け隔てなく近づいて、その功をねぎらっていました。舞台上でスピーチする指揮者は珍しいのですが、氏はかならずマイクをとって、演奏者だけでなく観客に対しても感謝の言葉を下さいます。朝比奈隆氏のように、90を過ぎて現役でタクトを振ってほしいと思いました。

（2026年3月中旬／サントリーホール）※演奏後には撮影が許可されています。

